

第2回大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会 緑整備部会記録《要旨》

- 日 時：令和3年1月26日（火）午後1時00分～午後2時45分
- 場 所：万博記念公園事務所4階 第2応接室
- 出席委員：山田部会長、井原専門委員、今西専門委員、檀浦専門委員
- 事務局：万博公園事務所長 ほか

内容：以下の議事について、協議

1. 万博の森の育成について
2. 日本庭園の新たな魅力創出について

1. 万博の森の育成について

（1）モデルエリアにおける施業内容について

事務局

本日欠席の澤田委員からの意見は、以下の通り。

- ・大径木を残す場合、ナラ枯れに注意する。
- ・残材は昆虫類のすみかになる。
- ・残材の使い道を作ることが継続的な仕組みづくりにつながる。

今西委員

残材について、生きものの生息地として、危険のない高さで積んでおくのが良い。クヌギやコナラなど、薪でよく使われる材は、薪として府民に提供・販売してもよいのではないか。森林管理としては、追加で費用が必要となるが、森の魅力発信のプロジェクトの一つとして位置づけ、残材を有効活用するということも考えられる。単に木を切るだけではなく、里山管理の一環として薪を使うことで、再生可能エネルギー、地球温暖化防止の貢献など、付加価値のあるPRができる。

山田委員

残材について、高木の幹は見栄えがよいが、低木やつる類はあまり良くない。また、火災の危険もある。低木・つる類の残材は、高木の幹とは分け、モデルエリアから撤去した方がよい。低木・つる類の残材は、重量は小さいがボリュームが大きくなる。

檀浦委員

薪としての利用はよい。しいたけのほだ木にするのもよい。海外の公園では、腐葉土をつくり、年に何回か市民に提供していた。市民には「〇月△日は土の日」として認知され、もらいに来て、積んで帰る。腐葉土や薪など、万博公園でつくられたものが市民の手に渡ることで、親近感が沸き、万博公園へ行こうという気持ちにつながる。

井原委員

特に3-3は、公園利用者にとって視界が開けて、里の風景が広がり、印象に残りやすい。施業をしている風景と、残材を様々な形で利用している状況を見せることが、情報発信として非常に効果的。3-3はモデルエリアの1つであり、見せ方に配慮した上で、

材としての活用に取り組めば、非常に価値があり、発展性の高い情報発信になる。

山田委員

樹木伐採に対するハレーションの懸念があるが、「どのような施業をしているか」をパネルなどで現場に掲示し、里山管理の試行を十分にアピールするべき。本格施業に入った段階では、施業自体を一般の人にも参加してもらうべき。将来的な市民参加につなげるためのアクションとして、モデルエリアである 3-2、3-3 から進めて、チェックをする。その過程の中で、残材のニーズも徐々に見極めていけばよい。

今西委員

燻製用のチップに使える樹種があれば、活用できる。単に伐採するとなると、「なぜ伐るのか」という意見も出るので、有効活用していることを看板などでアピールした方がよい。

山田委員

作業前の写真も撮影しておいて、変化をアピールできるようにした方がよい。保全育成するコナラの実生について、伐採作業時に残すとなると作業が大変なので、無理に残さなくてもよく、できる範囲で残せばよい。

(2) モニタリング内容について

事務局

本日欠席の澤田委員からの意見は、以下の通り。

- ・ナラ枯れ被害の把握が必要。
- ・炭素の固定量を把握するのはよい。

山田委員

万博公園内のナラ枯れの状況はどうか。

事務局

大発生するほどではないが、昨年度も何本か被害は出ている。これからも発生すると考えられる。

山田委員

記載するかは別にして、気をつけておく必要はある。

今西委員

『苗木の活着状況』の「小さい樹種について」はわかりにくいいため、「活着率が低い」、「成長が少ない」、「生育不良の」などにした方がよい。

『種多様性の変化』の「外来種の侵入」について、外来種だから悪いということではなく、在来種でも例えばクズのように林型の転換には困る種もある。外来種に言及してもよいが、「侵略的な外来種など、目標外の植物の侵入が起きないか」などとした方が、より適切。

『森林構造の変化』の「低林への転換の可能性分析」について、全域を低林にしてしま

うように読めるので、「目標林型への転換の可能性分析」にした方がよい。

『植物の生育基盤』の「土壌断面調査」の分析方法は土壌内の有機物量蓄積が増えているかどうかの分析のため、A層だけでなく、「A層やB層の形成状況」などとした方がよい。どのくらいの深さまで根が入っているかなど、樹木の根系分布状況も確認した方がよい。森の安全の視点からも、倒れやすさを判定するのに重要。また、樹木の根系分布状況は土壌硬度とも関わり深いので、「土壌貫入試験調査」と「土壌断面調査」を別々の場所で実施するのではなく、同じ場所で実施した方がよい。土壌硬度と根系の深さをリンクさせて分析した方がよい。

檀浦委員

土壌断面調査については、「有機物層の発達状況」としたらよい。樹木の根系分布状況は、倒木の危険性に効いてくる。深ければ同じ樹高でも倒れにくい。また、毎木調査における樹高データに基づいて、樹高マップを作成し、全域で樹高マップと土壌調査結果をあわせて見ることで、「この根の深さでこの樹高は危険」などと推定でき、使いやすい。樹高と合わせて分析することで、危険箇所の特定に役立てられる。

(3) 万博の森への立ち入り制限について

事務局

本日欠席の澤田委員からの意見は、以下の通り。

①森づくりの方向性との整合

- これまでは暗い森を明るい森、なるべく落葉樹林に転換に転換するとしてきたが、ナラ枯れなどで、落葉樹でも危険であれば伐採する必要がある。
- 大きな方向性は同じであるが、高林を目指すということについては、議論が必要。

②府民への説明

- 入れない場所を設ける、木を切ることにに対して様々な意見が出る。
- 「今の状態が普通ではなく、大きくなり過ぎたことが問題であること」をきっちりと理解してもらうべき。
- 「点検、対策が終わった場所から開放していく」など、見通しも示した方がよい。
- 完全に閉鎖するのではなく、イベントや観察会など、日を決めて開放するなど、どこを利用してもらいたい優先順位を決めて、早めに開放してはどうか。

今西委員

現地を確認したが、危険木・要注意木の伐採が進んでいる状況。利用者の感覚としては、すっきりしており、快適な散歩道になったように感じる。見通しもよくなった。現在の間引かれた上津道の状況であれば、公園利用者の評価が高まるのではないかと。

ただ、園路沿いの危険木を全部伐ると、皆伐状態となり、日陰がなくなって夏場は熱中症の危険が高まり、利用しづらくなる可能性がある。一定程度は健全な高木が残っている状況の方が望ましい。

上津道のような主園路では、園路沿いの幅をとった危険木の伐採ができるが、細園路ではやりづらいだろう。細園路が少し多い気もするため、絞り込みには賛成。残した細園路は、点検に時間をかける必要が出てくるが、人件費をかけてもやるべき。利用者としては、細園路があって、主園路間を行き来できるというニーズがあると思うので、可能な範囲で残した方がよい。細園路は傷んでいるので、車椅子やベビーカーなどが通れる

ように整備して、提供できればよい。どれだけ細園路の数を減らすのかは、利用者調査を行い、慎重に検討したらよい。

万博公園の魅力は、普通の公園のように隅々まで管理された森ではなく、自然を感じられるところ。鳥もたくさん来ているし、植物もいろいろ見ることができる。その魅力を損なわないよう、慎重に今後の方針を考えた方がよい。

井原委員

万博公園は、自然の残る森もあれば、手入れされた日本庭園もあるというメリハリが、他にない多様性を生んでいると思う。万博の森の持つある種の素朴さと快適性の折り合いは難しいが、そこを大事にすることが、固有性につながる。

どのように園路を通して、万博の森らしさを体感してもらえるかが重要。動線調査は大前提だが、それに加えて「いかに様々な生態系、空間を体験できるか」という観点から、管理者として「この園路を歩いてもらい、こういう風景をもっと見せたい」という考え方で、細園路の絞り込みを検討すべき。また、利用者は、何となく気持ちの良い道、快適な道を選び、近道をしていると思う。このような効果的な動線を把握し、モデルルートを設定することも考えられる。管理者と利用者の両方の目線で検討したらよい。

ただ、注意喚起看板について、目立つものを入れると非常に無粋になり、バランスが難しい。今の看板類は、歩行者の視線が止まるよりも手前に設置されており、視線の中にもうまく収まっていない。たくさん設置するのではなく、一定の間隔で、アイストップとなる場所に効果的に設置すべき。注意喚起看板はルートとセットで、調和にも配慮しつつ、どこに設置するかの検証を慎重に行うべき。

危険木や不健全木を集中して伐採した結果、快適性が高まり、安心感もあって、歩いていて心地よい感じになった。一方で、伐採により、その背後に隠れていた、立ち枯れ木などが見えてきた。毎年、夏には強風が吹き込み、風あたりが従来よりも強くなる状況で、どのような基準で、危険木、不健全木を取捨選択するか、一律とするか、風のあたりや、現状の樹勢からみて、危険だと判断されるものを優先的に伐っていくのか、伐採時のルールづくりが必要。

檀浦委員

鬱蒼と茂った木の下を抜けるのが森と感じる。その雰囲気は少しでも味わえるとよい。近道があることの心理的効果として、「奥に行ってみたい」という気持ちのサポートが挙げられる。簡単に帰れる、近道ができるという細園路があるのはよい。細園路の通行量はどう測るのか。

事務局

通行人を目視でカウントする予定。

檀浦委員

動物の行動をモニターするのに、自動撮影でカウントするものもある。使っていきたい園路があれば、そこに森づくりの投資をすればよい。また、ヘルメットを園路の端に置いておいて、「危ないが、通りたいならヘルメットを被ってもらう」よう、来園者に委ねてもよいのではないか。立ち入り制限エリアの看板について、簡易版と本格版とは？

事務局

簡易版はパウチしたもので、意思表示するもの。本格版は木製のものを想定。

山田委員

園路をできるだけ多く残して欲しいと思うが、実行可能な範囲で、森の中を歩ける空間を多めにとっていただければと思う。

2. 日本庭園の新たな魅力創出について

(1) 検証項目について

井原委員

他庭園との比較について、それぞれの庭園の立地特性、作られた年代が異なるので、一概に同列で比較できないが、特別名勝に指定されている集客力のある庭園は、歴史性が高い。質をしっかりと維持しながら、様々な魅力発信を行っている。万博の日本庭園は、圧倒的なスケールの大きさに加え、万博のレガシー性という、歴史的価値を有している。特別名勝を目標とすることは、非常に長い目で見て、決して無謀な夢ではなく、段階的にそうなり得るポテンシャルはある。従って、その歴史的価値、本質的価値を維持・継承していくことが大事である。

ただ、万博の日本庭園に関わり、またこれまでの経緯について調べた結果、感じるのは、整備や改修内容について、よって立つ軸が揺れ動いてきたことである。歴史的価値、本質的価値を維持し、高める内容であればよいが、その時々々の運営管理の考え方によって、相反するものが導入されることもある。管理体制が変動していく中、よって立つ軸を明確にするものとして、名勝という枠組みは効果的だと考えている。提示されているような手続きの煩雑化はあるが、ただし、現在の文化財行政は、本質的価値を明確にしたうえで、自治体の計画に基づき、保全・活用を進めていく方向になっている。今回の検証プロセスの中で、当時の作庭思想がはっきりした。また、当時の写真の検証により、「かつてどういう風景で、何が変わったのか」を把握し、そこから計画立てて、進めようとしている。この方法をそのまま適用することができる。その時々々の流れや体制で変化するのはではなく、名勝というスキームができることで、この庭園が有している歴史的価値、本質的価値を維持し、高めることができる。ぜひ導入を検討していただきたい。

また、ハードを改変せずとも、情報発信やソフト面の活用で可能性が開けてくる。例えば、現代地区において、形を変えるのではなく、シンメトリーで幾何学的なインパクトあるデザインを活かし、モダンなライトアップで新しさを強調することもできる。千里キャンドルロードを、日本庭園で展開する可能性も考えられる。

名勝を含めた管理運営スキームを確立させ、かつハードだけでないソフトの活用と情報発信のあり方の検討を進めることが、日本庭園に人を呼び込み、価値を広げていくと思う。価値の維持と両立する魅力創出を、ぜひ検討されたい。

今西委員

訪日外国人が他の庭園と比較して極端に少ない。国内だけではなく、海外へ情報発信も必要。日本庭園が広いため、一周りするのに一苦労することから、次世代モビリティの活用は適している。庭園を阻害しない形でのモビリティの検討は、来園者数を増やす鍵

になると思う。

檀浦委員

竹林の小径がさっぱりしたと感じた。千里庵は素敵な建物なので、様々なことに活用できるポテンシャルはあるのではないかと。

ジャンボタニシの天敵として、ホタルの幼虫が捕食するらしい。ホタルが舞うとおもしろい。

山田委員

堺市の大仙公園にも立派な日本庭園があり、京都にも負けなと思うが、知られていない。府内に気楽に行けるよい庭園があることをアピールすれば、もっと人が来ると思う。カワセミのいる日本庭園もあまりないので、個性と言える。府内の有効な観光資源として、アピールできるのではないかと。

今西委員

1号休憩所は建物がよかったが、名前がもったいない。素晴らしいデザインと思うので、このデザインを維持して、補修しながらぜひ残してほしい。

井原委員

当初、つくった建築物、工作物は原則、できるだけその形を維持すべき。じっくりと考えられたものが多い。

以上